

自尊心と被服行動

—身体像，身体カセクシス，および，被服行動が自尊心に
およぼす影響過程モデルの提案—

Self-esteem and Clothing behavior:

Influence Processes Model of Body image, Body-cathexis
and Clothing behavior upon Self-esteem

田 中 優 *

Masashi TANAKA

<キーワード>

身体像，身体カセクシス，被服行動，自己過程，自尊心，自己高揚，自己防衛，影響過程モデル

Body image, Body-cathexis, Clothing behavior, Self process, Self-esteem, Self-enhancement, Self-defence, Influence Processes Model

<要 約>

本小論では，まず，社会心理学と被服学における自己と被服行動との関連に関するこれまでの研究をレビューした。そしてこの問題における研究に関して，以下の問題点を指摘した。

- 1) 研究で扱われる概念が，社会心理学と被服学の両領域間で，その用語の使われ方が一致しない。
- 2) これまでの研究は，相関研究が多く，考察において因果の推定をするにとどまる研究が多い。
- 3) これまで提案された自己と被服行動の関連を説明するモデルでは，概念的な説明の段階でとどまっており，具体的な行動レベルでの説明が可能なモデルの考案やそのモデルの検証がほとんどなされていない。

そこで，社会的行動を説明する自己過程（中村,1990）を紹介し，その中心的な概念である自尊心について説明した後に，被服行動をより具体的な行動レベルで説明するモデルとして，身体像，身体カセクシス，および，被服行動が，自尊心におよぼす影響過程モデルを提案した。

1. はじめに

困っている人を目の前にしたとき、その人に援助の手を差し延べるのか、それとも、そのまま何もせず知らぬ振りをするのか、または、間違いを指摘されたときに、指摘した人に感謝の意を述べるのか、それとも、指摘した人を非難するののかというように、社会的状況において個人が示す行動はその個人の「自己」に強く規定されている。同じように、それほどフォーマルでもないパーティーでどのような装いをするのか、または、初めてのデートにどのような服装をするのかなど、被服行動においても、自己が、その行動に影響をおよぼす。あるいは、制服を着ることによって普段の自分とは異なる言動が表れる、または、変装することによっていつもとは違う自分になれるなど、被服行動が、自己に影響を与えることも考えられる。

本小論では、まず、社会心理学と被服学における自己と被服行動との関連に関するこれまでの研究をレビューする。そして、社会的行動を説明する自己過程(中村,1990)を紹介し、その中心的な概念である自尊心についても説明する。そして最後に、被服行動をより具体的な行動レベルで説明するモデルとして、身体像、身体カセクシス、および、被服行動が、自尊心におよぼす影響過程モデルを提案する。

2. 自己と被服行動に関する研究

ここでは、社会心理学と被服学における自己と被服行動との関連に関するこれまでの研究として、自己概念と被服行動、自己呈示と被服行動、対人認知と被服行動、そして、自己と被服行動との概念的関係モデルに関する研究を紹介する。

(1) 自己概念と被服行動

われわれは、自己概念に沿った形で、着衣を選択するなど、自己概念が被服行動を左右する場合がある。藤原(1986)は、女子大学生、および、女子短期大学生251名を対象にした調査で、自己概念と被服行動との関連を明らかにしている。そ

れによれば、自分は気が弱く、消極的で地味であるという自己概念をいだいている人は、あまり抵抗のなさそうな、保守的なスタイルの衣服を買い、あまり目立たない、慎み深い服装をする傾向があった。また、自分にはぎやかで、おしゃべりで、明るくて活発、つまり、外向的であるという自己概念をいだいている人は、多くの仲間が着ているタイプの衣服を着用し、服装に関する友人のアドバイスを受け入れる傾向があった。そして、自分は内向的であるという自己概念をいだいている人は、保守的な服装をするという傾向があった。さらに、自己概念のなかで自分の性に関連する性役割同一性と被服行動との関連については、小林(1989)が、性役割同一性と着装態度との関連を明らかにしている。調査では、男子大学生を、純男性的、やや男性的、両性的、やや女性的、純女性的の5群に分類し、群間での着装態度が比較された。結果は、純女性的男性、および、両性的男性は、純男性的男性に比べて、ファッションに関心をもち、外見を重視するといった、被服に関する強い関心があった。

(2) 自己呈示と被服行動

われわれは、就職の面接や重要な他者と対面するときに、被服により、自分が好ましいと思う自己のある側面を強調したり、作り出そうとする。このように、われわれは、他者がいざでであろう自分の印象をよりよいものに操作することを目的として、自分のある側面を強調して伝達しようとする。このことを社会心理学では、自己呈示(self presentation)とよんでいる。Learyら(1990)は、われわれが、どのようなときに自己呈示しようとするのかについて、つぎの3つの要因を明らかにしている。まず一つ目は、第一志望の会社面接や、尊敬する恩師宅への訪問には、そうでないときよりも、身だしなみに気をつけるという場合のような、「自分が高い価値をおいている目標と関連するとき」である。2つ目は、第一志望の会社面接での、受付の案内係よりも、面接者に対する方が、動機づけは高まるという場合のような、「目標達成への関連性が高いとき」である。3つ目は、面

接場面で、面接者が、自分がいだいているものとは全く反対の印象をいだいていることがわかったとき、必死になってその印象を自分のものに近づけようとする場合のような、「自分が望ましいと考えている印象と、相手が自分に対していだいていると思われる印象の間にギャップが生じたとき」である。

(3) 対人認知と被服行動

われわれは、初対面である人物に対する印象形成を行う際、その人物が着装している被服を重要な情報源として注目することがある。被服や外見は、他者がわれわれについてどのような印象をもつかということに関して重要な働きをする。神山(1996)は、対人認知における装いの効果についての研究を外観し、以下のようにまとめている。①服装の特徴から受ける人格の印象内容は、おおむね、個人的親しみやすさ(親和性)、活動性(積極性)、社会的望ましさ(思慮性)の3つである(神山・牛田・栢田,1987a,b;永野・小嶋,1990,など)。②上衣(上半身に着装する衣服)の諸特性が個人的親しみやすさの印象をいっそう左右しやすいのに対して、下衣(下半身に着装する衣服)の諸特性は活動性や社会的望ましさの印象をいっそう左右しやすい(永野・小嶋,1990)。③顔立ちの特徴が活動性の印象にいっそう通じやすいのに対して、服装の特徴は個人的親しみやすさの印象にいっそう通じやすい(Conner, Peters & Nagasawa, 1975)。服装から形成される人格の印象は体型の影響を受け(神山・牛田・栢田, 1988; Johnson, 1990), たとえば高い身長が有能さを認知させるのに対して、体重の軽さは女性では社交能力の高さを、男性では逆に社交能力の低さを認知させる(Cann,1991)。⑤米国などに比べて、わが国では服装の特徴は社会的望ましさの印象を生起させやすい(神山・牛田・栢田,1987a,b)。⑥服装の流行性やその他の特徴は、特定の問題解決能力(たとえば、仕事能力や芸術的才能; Johnson & Roach-Higgins,1987)や社会的能力(特に専門性勢力や正当性勢力; Temple & Loewen, 1993)の印象に影響する。⑦服装から受ける人格の印象内容には

個人差があり、たとえば観察者の自尊感情の高低によって異なった人物評価が行われる。またこの評価の違いは、個性的なイメージの服装と、その逆のおとなしいイメージの服装に関して表れやすい(杉山・小林,1992)。⑧服装から受ける人格の印象内容は、観察者の、被服や装いへの関心度によって左右される(Paek, 1986; Bell,1991など)。

(4) 自己と被服行動との概念的関係モデル

これまで見てきたように、自己と被服行動の間には非常に密接な関連がある。神山(1996)は、人間の装いには、「装飾(かざる)」、「整容(ととのえる)」、「変身(ふりをする)」の3つの意味があるとしている。そして、装いには、①他者に何かを伝えるという「情報伝達」機能、②自分自身を確認し、強め、あるいは、変えるという「自己の確認・強化・変容」機能、そして、③他者との行為のやりとりを規定するという「社会的相互作用の促進・抑制」機能の3つの社会・心理的機能があるとしている。そして、装いと自己との概念的な関係を図1のようにまとめている。図中の自己の顕示/隠蔽は、装いの「情報伝達」機能が観察される側面であり、また、自己の確認/強化/変容は、装いに関して「自己の確認・強化・変容」機能が確認される側面である。彼は、装いが確認させ、強化し、あるいは、変える対象としての自己には、ボディイメージ(身体像, body image)と、それを一部に含めたセルフイメージ(自己像, self image)があるだろうとしている。さらに、いずれの側面においても、自己を防衛する(防ぎ守る)ためか、自己を高揚する(高め強くする)ために装われるとしている(図1)。

このモデルは、自己と被服行動との関係を概念的に捉えるモデルであり、新しい視点とアイデアを社会心理学と被服学の研究者に与え、研究の出発点として、非常に先駆的な役割を果たしているといえよう。

(5) この領域における研究の問題点

これまでみてきたように、現在、社会心理学や被服学の領域では、被服行動と自己との関連につ

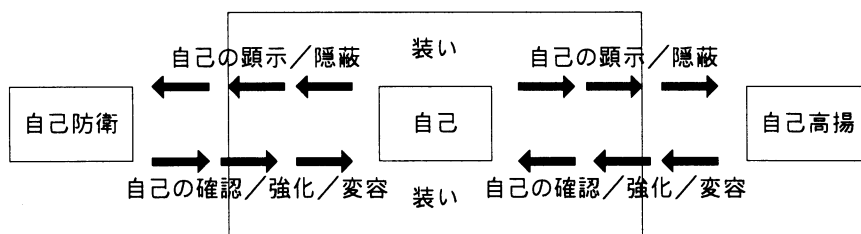


図1：装いと自己との関係

神山（1996）から引用

いてさまざまな研究がなされている。ここで、この領域における研究の問題点をまとめてみたい。まず、研究で扱われる概念については、社会心理学と被服学の両領域間で、その用語の使われ方が一致しない場合がしばしば見受けられる。たとえば、本小論で問題にする自己、自己意識、自尊心などは、心理学の領域においても、非常にさまざまな定義がされているため、領域間での統一は難しいともいえるが、両領域からの歩み寄りが必要であると考えられる。また、これまでの研究では、「〇〇な性格特性をもっている人は、××な服装を好む」というような相関研究が多く、考察として、因果の推定まででとどまる研究が非常に多いといえる。さらに、被服行動を説明するモデルもいくつか提案されてはいるが、概念的な説明の段階でとどまっており、具体的な行動レベルでの説明が可能なモデルの考案やそのモデルの検証は、ほとんどなされていない。

そこで、具体的な着装行動や、それに関わる影響過程のプロセスを説明するために、以後では、筆者の身体像、身体カセクシス、および、被服行動が自尊心におよぼす影響過程モデルを提案したい。そのために、まず、「自己」に関する新しいモデルとしての「自己過程」、そして、その中心的役割を果たす「自尊心」について説明する。

3. 自己過程

(1) 自己過程

中村（1990）は、「自己」に関わる一連の現象的過程を「自己過程」として捉え、「自己過程」

と社会的場面における個人の行動（社会的行動）との関係を説明している。自己過程とは、「自己の姿への注目」の段階、「自己の姿の把握」の段階、「自己の姿への評価」の段階、そして、「自己の姿の表出」の段階の4つの段階から成り立つ過程である。まず最初の「自己の姿への注目」は、自分の外観や心理的状态、さらには他者との社会的関係などに自ら注目し、それらに注意の焦点（focus of attention）をおく段階である。2つ目の「自己の姿の把握」は、自分が自己に注目したことの結果として自己の状態の特徴を自分なりに描き、概念化する段階であり、この段階で「自己像（self-image）」や「自己概念（self-concept）」が形成される。そして3つ目の「自己の姿への評価」は、描き出した自分についての像や概念を評価する「自己評価（self-evaluation）」の段階である。また、自己に関するさまざまな側面の評価を総合し、自己の現状に満足し、自信をもつ程度を「自尊心（自尊感情：self-esteem）」とよぶ。そして、最後の「自己の姿の表出」は、社会的状況のなかで、自己の姿を他者に示す行動の段階である。自己をありのまま他者に示す行為の「自己開示（self-disclosure）」と、他者がいづく印象を操作しようとして自己を示す行為の「自己呈示（self-presentation）」がこの段階に含まれる。

(2) 自尊心

われわれは、他者との相互作用のなかで形成した自己概念を、それがどの程度のものであるのか評価しようとする。評価は、ある基準より優れて

いるか劣っているという問題に終わらず、自分としてはそれで満足できるのかということが重要であり、自己の現状に満足し、自信をもつ程度を「自尊心（自尊感情：self-esteem）」とよぶ。中村（1991）は、「『自己過程』成立の意味からいっても、またその機能の面からみても、この一連の過程の中心的存在は『自己評価』やその総合体のような『自尊感情』なのではないかと考える」としている。

また、われわれは、自分の「自尊心」の現状を維持したい、そして、向上させたいという「自己高揚（self-enhancement）」、あるいは、現在の「自尊心」を傷つけられたくないという「自己防衛（self-defence）」の欲求をもつ。この欲求は、われわれのさまざまな行動と大きく関わっており、特に、被服行動においては密接な関わりがある。

（3）自尊心と被服行動

藤原（1982）は、女子大学生164名を対象とした調査により、自尊心と被服の関心度との関係を明らかにしている。それによれば、被服の関心度を示す5つの因子のうち、「個性の強調」、「社会的受容」、「慎み深さ」の3因子と自尊心との間には、有意な相関がみられた。つまり、自尊心の高い女子大学生は、その個性を強調するような被服の用い方をし、低い自尊心の学生は、社会的受容、慎み深さを重視した被服行動をとる傾向が示されている。

自尊心と被服行動との関係を考える場合、自分の身体全体、あるいは、一部に対する心像である「身体像（body image）」、そして、身体像に対する自己評価の結果としての満足感である「身体カセクシス（body-cathexis）」、および、自己のさまざまな側面に対する自己評価の結果としての満足感である「自己カセクシス（self-cathexis）」が重要になる。われわれは、身体カセクシスや自己カセクシスに応じて、その満足度をより高めるため、あるいは、低めないようにするために被服を利用するが、この場合、自尊心を高めることが自己高揚であり、維持することが自己防衛である。

4. 身体像、身体カセクシス、および、被服行動が、自尊心におよぼす影響過程モデルの提案

これまで述べてきたように、自己と被服行動に関する多くの研究がなされてきているにもかかわらず、その関連性や影響過程に関する行動レベルでの説明モデルはほとんど提案されていない。そこで、図2に、個人がいだく身体像、それに対する評価と満足度としての身体カセクシス、それに対応する被服行動、そして、その結果としての自尊心への影響過程モデルを示した。なお、このモデルにおける他者とは、一般の不定多数の他者、あるいは、個人にとって非常に意味のある他者の両方を含むものである（図2）。

まず、左側のフローの自己高揚の影響過程については、たとえば、自分は非常に理想的なプロポジションをしているという身体像をいだいている個人は、非常にポジティブな身体カセクシスをもっていると考えられる。そして、そのことがその個人にとって非常に価値あるものとして捉えられていけば、被服行動によって自己を高揚させようという自己高揚の欲求が起こる。被服行動による自己高揚には、多くの場合、その身体特徴を「顕示」する行動が採用される。「顕示」には、特徴を目立たせるための露出、特徴を強調するための誇張、特徴をよりよく見せるための装飾などの様式が含まれる。つぎに、これらのなかで、もっとも効果的な顕示の様式の検討とそれに対する他者反応の予測を行う、効果の検討が行われる。効果がないと判断された場合、被服行動による自己高揚の欲求はなくなり、身体像、および、身体カセクシスの変容へと至る。あるいは、顕示の効果があると判断された場合は、顕示の被服行動が実行される。たとえば、より身体のラインが強調されるようなびったりしたTシャツやスリムなGパンなどが着装される。その結果、他者から「スタイルがいい」とか「そのスーツは似合っている」などとポジティブな反応が示されれば、それによって自己高揚がもたらされ、自尊心はより強化される。しかし、他者からの反応がなかったり、ネ

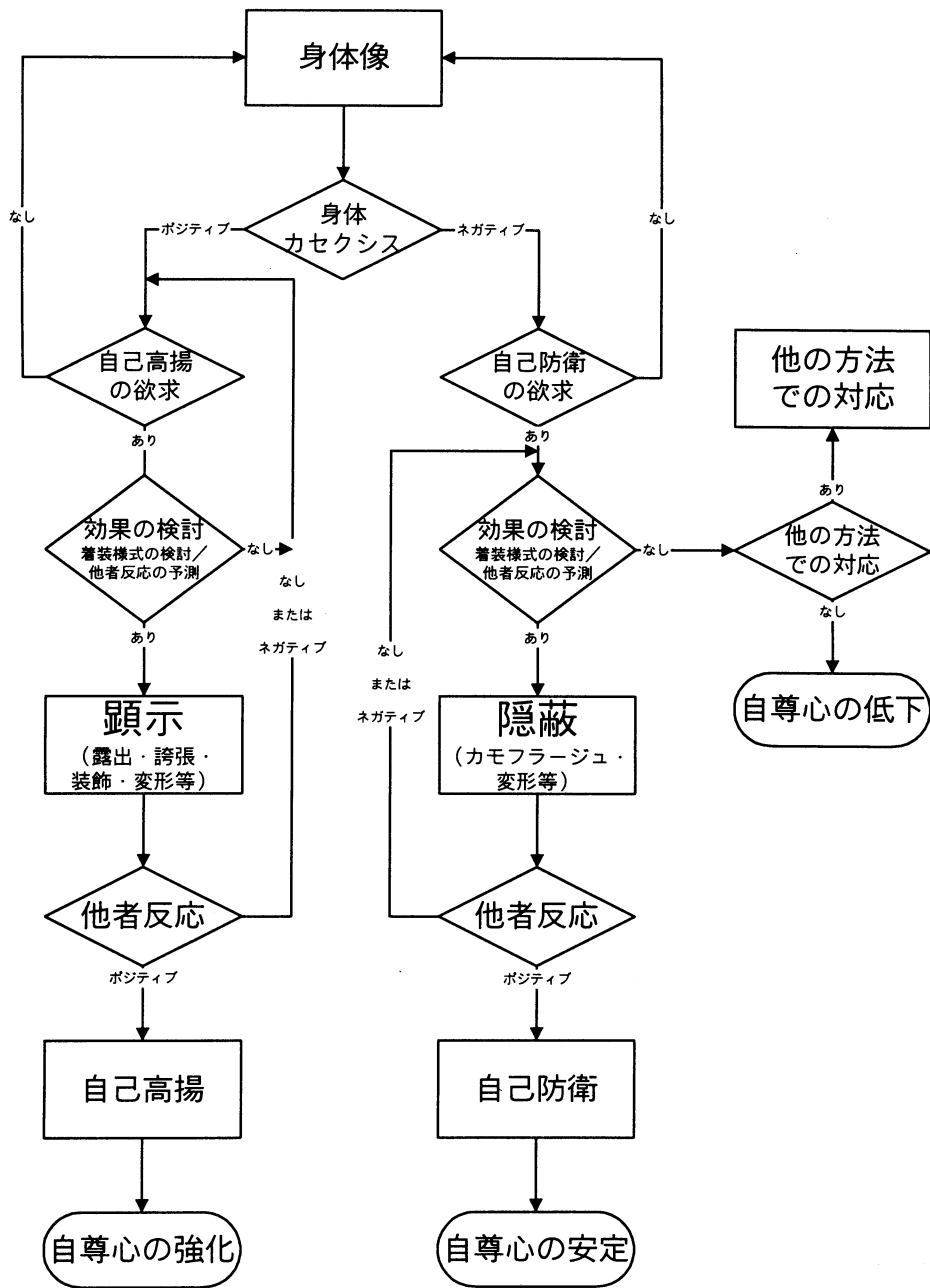


図2：身体像，身体カセクシス，および，被服行動が自尊心におよぼす影響過程

ガティブなものであった場合、再度、自己高揚の欲求の段階にもどり、着装様式や他者反応の再検討がなされる。しかし仮に、他者からの反応があまりにもネガティブであった場合、顕示による自己高揚の欲求はなくなり、それまでのポジティブな身体像や身体カセクシスは、ネガティブなものへとそれぞれ変容し、自尊心への脅威となり、自己防衛の過程へと至る。そして、最悪の場合、それまで誇りに思っていた身体的特徴に対してコンプレックスを感じるまでに、自尊心を低下することとなる。

つぎに、右側のフローの自己防衛の影響過程については、たとえば、自分は非常に太っているという身体像をいだいている人は、ネガティブな身体カセクシスをもっていると考えられる。そして、そのことがその人にとって非常に自尊心への脅威となるものとして捉えられれば、被服行動によって自己を防衛しようという自己防衛の欲求が起こる。被服行動による自己防衛には、多くの場合、その身体特徴を「隠蔽」する行動が採用される。「隠蔽」には、特徴を目立たせないための隠蔽、特徴への注意をそらしたり、気づかせないようにするためのカモフラージュ、特徴をより望ましく見せるための変形などの様式が含まれる。つぎに、これらのなかで、もっとも効果的に自己を防衛できる隠蔽の様式の検討とそれに対する他者反応の予測を行う、効果の検討が行われる。しかし、効果がないと判断された場合、被服行動による自己防衛は採択されず、他の方法での自己防衛が検討される。効果的な他の方法も見つからなかった場合には、現在の自尊心の低下へと至る。あるいは、隠蔽の効果があると判断された場合は、隠蔽の被服行動が実行される。たとえば、あまり身体のラインが目立たないようなゆったりとしたシャツやゆとりのあるパンツなどが着装される。その結果、他者から「その服は似合っている」などとポジティブな反応が示されれば、それによって自己防衛が達成され、自尊心は安定する。しかし、他者からの反応がなかったり、ネガティブなものであった場合、再度、効果の検討の段階にもどり、着装様式や他者反応の再検討がなされる。

5. まとめと今後の展望

本小論では、自己と被服行動に関する社会心理学、および、被服学における両領域の研究をレビューし、それらを統合的にまとめた神山のモデルを紹介した。さらに、それに自己過程の考え方を加え、より現象レベル、あるいは、行動レベルでの説明を目指した、身体像、身体カセクシス、および、被服行動が自尊心におよぼす影響過程のモデルを提案した。

今後は、このモデルについて、データによる検証を行い、モデルの妥当性を検証し、さらなるモデルの精緻化を図る必要がある。

また、神山(1996)は、装いが確認させ、強化し、あるいは、変える対象としての自己には、ボディイメージ(身体像, body image)と、それを一部に含めたセルフイメージ(自己像, self image)とがあるだろうとしている。本小論で提案するモデルは、「身体像」、「身体カセクシス」、「被服行動」、そして、「自尊心の強化あるいは安定」という概念間の一連の過程を扱うものであり、「装いがボディイメージにおよぼす影響」との関連が強いモデルである。今後、神山が述べている「装いがセルフイメージにおよぼす影響」との関連をも視野に入れて、モデルを改良、あるいは、新しいモデルを考案する必要があるだろう。

<引用文献>

- Cann, A. 1991 Stereotypes about physical and social characteristics based on social and professional competence information. *The Journal of Social Psychology*, 131 (2), 225-231.
- Conner, B. H., Peters, K., & Nagasawa, R. H. 1975 Person and costume: Effects on the formation of first impressions. *Home Economics Research Journal*, 4 (1), 32-41.
- 藤原康晴 1982 女子大生の被服の関心度と自尊感情との関係 家政学雑誌, 33(10), 548-552.
- 藤原康晴 1986 女子大生の被服関心度と自己概念および自尊感情との関係 家政学雑誌, 37 (6), 493-499.

- Johnson, K. K. P. 1990 Impressions of personality based on body forms. *Clothing and Textiles Research Journal*, 8(4),34-39.
- Johnson, K. K. P. & Roach-Higgins, M.E. 1987 Dress and physical attractiveness of women in job interviews. *Clothing and Textiles Research Journal*, 5(3), 1-8.
- 小林茂雄 1989 生活の表現へ 日本家政学会（編）家政学シリーズ13 表現としての被服 朝倉書店
- 神山進 1996 被服心理学の動向 高木修（監）大坊郁夫・神山進（編）被服と化粧の社会心理学 北大路書房, 1-24.
- 神山進・牛田聡子・栢田庸 1987a 服装に関する暗黙裡のパーソナリティ理論（第1報）繊維製品消費科学, 28, 25-35.
- 神山進・牛田聡子・栢田庸 1987b 服装に関する暗黙裡のパーソナリティ理論（第2報）繊維製品消費科学, 28, 77-84.
- 神山進・牛田聡子・栢田庸 1988 身体に関する暗黙裡のパーソナリティ理論 繊維製品消費科学, 29, 540-548.
- Leary, M.R. & Kowalski, R.M. 1990 Impression management: A literature review and two component model. *Psychology Bulletin*, 107, 34-47.
- 永野光朗・小嶋外弘 1990 服装特徴と印象形成 繊維製品消費科学, 31, 288-293.
- 中村陽吉 1990 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会
- 中村陽吉 1991 特集の言葉 社会心理学における『自己過程』の問題 社会心理学研究 6(3), 131-137.
- 杉山真理・小林茂雄 1992 見る側のパーソナリティと服装イメージによる見られる側のパーソナリティの想定 繊維機械学会誌, 45, T95-104.
- Temple, L. E. & Loewen, K. R. 1993 Perceptions of power: First impressions of a woman wearing a jacket. *Perceptual and Motor Skills*, 76, 339-348.